日英語の比較研究

——口語表現に於ける主体をめぐって——

松 崎 英 敏

I

欧米の言語がリアリズム基調の形態を具有するとすれば，日本の言語は反リアリズムの様態を具備するという見方が可能である．

俳諧に於ける不同調，軟焦点，そして焦点転移の表現法が現代日本語の深奥に変容して散在しているほどと把捉しても肯定し得るのではあるまいか[(1)]．言語自体が現存の事象の抽象化した存在とはいえ，日本語は欧米の言語とは極めて大きな相違を示し，単なる事象の抽象を超過し，抽象活動の一層深化した結果として存在すると考察され得るからである．

だが，日本語の所持する諸特徴を好意的に把捉し，いわば〝洗練された芸術品〟にまで奉るこの見方は，明治以来の日本語不完全論に端を発す一連の日本語軽視の風潮に対応した反駁論と見做せなくもない．

確かに，絵画に於いてはその軌跡が基底を写実としてから，映像世界の隆盛に反比例してその写実度の低下を明示し，彫刻に於いても同様の傾向を顕示し，かつ映像世界に於いても写実性の発揮の後，同様に抽象指向の傾向を具現している．また，文学の面に於いてもその傾向は存在し，詩がかつての写実的表現から抽象的表現へとその性格を変化させ，やがてモダニズムの到来を告知する等その良例であろう．

文化の諸側面に於けるこの傾向は，同様に文化の一翼を担う言語の世界に於いても当然存在するものと推察し得る．リアリズムを基調とした言語表現は，長期的に考察すれば単に写実的に事象を描写する低次のリアリズムから脱却し，高度な抽象表現へと指向すると了解するのも自然であろう．

そう理解した時，日本語の所持する反リアリズム的性格は言語表現の高度に進歩した産物であると好意的に結論づけ，他方欧米語のリアリズム的表現を書生的かつ冗長気味と見做すのも故無しとするものではない．

しかしながら，日本語文内に於ける主体の表象となる主語の欠如を中心とした種々の特徴が，日本人に内在する性格と根底に於いて連結し，日本語不完全論を幇助する様相を呈示しているのも今日に始まるものではない．従って，もはやそれを座視したままにしておくのは不可能と考えられる．

もともと日本語不完全論の登場するに至った図式は，西洋文明の決定的な優位→日本の立遅れ→西洋言語の優秀性→日本語の劣等性→国字の非能率→国語改良の必要と表示することが可能であるが[(2)]，実は側面から観察すれば，今日に於いてもこの不完全論の衰滅しないのは，日本人に付帯する消極的一面が欧米人との比較に於いて欧米人的存在に到達し得ぬという不満を内包する立場から把捉した結果が，日本語自体に内含される特徴と連結してその一因を支えているからであると言えよう．今日の状況から判断すれば，この観点からの見方は益々勢力を増大するものと推察し得る．

欧米人との比較に於いて，日本人の対人関係上の自覚の欠落乃至主体性の欠如という消極的一面の存在はもはや人口に膾炙していることと思われる．その上それを基点とし，数々の日本人の特徴，例えば口下手，社交下手等が挙げられてもいる．だが，これらの諸特徴は根本ではおよそ主体性の問題へと集約でき得ると考えられる．

戦後喧しく言われた主体性の所持という言葉は，早くも言旧された観を呈しているが，これらの指摘が今日の社会状況から判断して現在でも拘泥すべき余地を残存させているものと考える．そこで本稿では，日本人に内在する主体が言語構造上如何なる状況の中に置かれ，またそれを包囲する状況とのからみで如何に反応するかを時に英語との比較を通じて明らかにし，主体の動静を見て

いく．しかし，ここでは話し手としての主体と相手となる聞き手との関係を日英口語表現の中に限定してその狙いを獲得することとする．

それはまた，日本語不完全論の助力となる一因を改めて考察することとも解釈し得よう．

II

始めに『雪国』の中から抜粋した幾つかの口語表現を英訳との対照に於いて考察することにする．[3]

(1)　「……帰る，帰る．」（p. 32）

(2)　「私，帰るわ．」（p. 39）

(3)　「……帰りますわ．」（p. 41）

(4)　「帰るの．」（p. 64）

(5)　「帰るわね．」（p. 92）

これらは全て話し手駒子の聞き手島村に対する言葉であるが，いずれも「帰る」という動作を伝達する言辞でありながら，その表現法は微妙な変化を表出している．(2)を除外する全部の表現に発言者駒子の主語が省略され，『文章読本』中の谷崎潤一郎の指摘[4]通りの型が概観できる．また，これらは主体と客体との対立関係を所持せぬ日本語独特の表現で，演劇的要素が欠落し，かつ独白的であるが，[5]話者と聴者の様子は彷彿として浮かんでくる．

双方とも同一人物であるにも拘らず，その時点に於ける立場の相違から発生する二者間の瞬時的に変様する人間関係の微妙な綾が主語を損欠しながらも漠然と表出されているのである．例えば(1)の場合，(2)，(3)，(5)とは異って「わ」という終助詞を付与せずに話し手の感情を直截に表現している．従って，聞き手との間に心的な障壁が払拭されて，相互の内的距離が近接せざるを得なくなっているのである．ここでは話し手の聞き手への隠蔽された感情を抑制することなく吐露した部分と解釈できる．話し手駒子と聞き手島村は初対面から時間的にそれほど経過しておらず心的距離は隔離しているはずであったが，話し

手の泥酔によってその距離計算が話し手側にて実施されていない．そのために表現上に於いても話し手の聞き手への心的接近が感受できるのである．また，話し手の自己への説諭としての言い切りの反面，聞き手への甘えを男性語的強勢語を吐くことによって表現してもいるのである．

(4)の場合は，「わ」という終助詞は使用せずに「の」という同様の終助詞を付加することによって自らのアイデア実践の心情を自分と相手とに断言する意味を表出している．この念を押す断定表現は，既に聞き手と話し手とが心的に極めて接近していた事実を示唆するものでもあると考えられる．確かにこの場面では話し手と聞き手の人間関係は極めて親密で話し手は聞き手に心的に引かれる状況から脱却せねばならぬことを内心に於いて自戒しているところであった．また終助詞「の」の使用は，話者の心情を率直に表現せずに話者の操作を経由した表現であることを示し，聞き手への配慮を感得することができる．

(2)，(3)，(5)は全て「わ」の終助詞を付加して，まず話し手が女性であることを明示し，同時に聞き手との距離を和らげている．(2)と(5)は「帰る」に「わ」を接合させて両者の関係の密度の濃さを示唆しているが，(3)は「帰ります」となって丁寧語「ます」が話し手の聞き手に対する配慮の大きさを暗示しているのである．また，話し手と聞き手との心的距離は先の諸例より間隔の大なることが理解できる．さらに聞き手の精神的立場が話し手より優位であることも看取できよう．また(5)は「帰るわ」という表現にさらに「ね」という間投助詞を補足することによって聞き手への呼掛けを表現しているが，話し手の聞き手への優しさが滲出されていると言えよう．

このように日本語に於いては，二者間の人間関係の微妙な変化がそのまま述語表現の中に表現されているのである．

しかし，驚嘆すべきことに英語に於いてはいずれも単に“I am going home.”[(6)]と訳出されているのみで何らの変化も加えられていないのである．従って，英語に於いては両者の心的状況を知覚する手段は文脈に依拠するだけとなる．だが，文脈からの推量だけでは日本語表現の場合ほど両者の内面的関係にまで立ち入ることは不可能である．

また，換言すれば，英語の場合話し手は聞き手をこれほどまでに意識してそ

の動詞表現の中に微細な変化を表出しているとは言えないであろうし，それは不可能であろう．言うまでもなく英語表現に於いても話し手が聞き手に対して心を砕くことは存在する．例えば，“Shall I send if to you?”と相手の意志を聞くより“Would you like me to send it to you?”と希望を聞いた方が丁寧であり，また“I hope to see you soon.”より“I'm hoping to see you soon.”と進行形現在時制を使用する方が丁寧である．これは話し手の聞き手への敬意を表示する表現である．このような敬意表現は多数存在するが[(7)]，それでも先に取り上げた日本語表現とは圧倒的な相違があると考えられる．何故なら，英語に於いては先例の如く両者の心的立場の微細な変化にまで表現が対応することはなく極めて大味な差異を把捉するに止っているからである．そしてまた，話し手が聞き手に対し，日本語の場合のように終始敬意表現に付纏われるということも少ないと考えられるからである．無論，例外は免れ得ないが英語の場合，話し手の聞き手への大摑みな敬意は問題にしても，日本語の場合のように話者の地位の立場に符合した話し方が存在するといったほど両者の立場のギャップをことさら問題にする習慣は希薄と言えるであろう．

さらに，先の『雪国』の中から別種の表現を取り上げてみる．前例同様話し手駒子の聞き手島村に対する言辞である．

(1)　「起きなさい．ねえ，起きなさいったら．」（p. 33）
　　“Get up.　Get up when a person tells you to”（p. 36）

(2)　「……起きなさい．起きなさいってば．」（p. 65）
　　“……Get up.　Get up, I tell you.”（p. 78）

(3)　「起きなさいよ．」（p. 90）
　　“It's time to get up.”（p. 113）

(4)　「起きなさい．起きて頂戴．」（p. 90）
　　“Get up.　Get up, please.”（p. 114）

この四例は「起きる」という動詞を基盤とした命令文であるため，その性質上二者相互の心的距離を微細な点まで表現し難いが，前例の「帰る」より大様であってもやはり話し手の聞き手を値踏みしての言葉表現がなされている．全て

女性としての話し手の呼掛けであるが，まず「起きなさい」という表現はいずれも“Get up.”と訳出されていて話者の性質を捕捉する情報はそこから獲得できない．だが，日本語の場合は最低限話者が女性であるかもしれぬという情報は提供されている．またそうでなくとも話し手が丁寧な言葉使いをする人物であるという情報を付与しているのである．

(1)の場合の「ねえ，起きなさいったら」という表現も女性の話し手の甘い感情を匂わすが，英語表現に於ける“Get up when a person tells you to.”では話者の女性であることは感得できないのみならず同時に甘えた気分を感受することも不可能である．ただ相手に起きることを強要する説教染みた点が看取できるだけである．同様に，(2)，(4)も日本語の場合，女性の話し手であることを明確に表出しているが，“Get up I tell you.”や“Get up, please.”ではその情報が内包されていない．同時に話し手の甘えも内在し得ないでいる．(2)に於いてはただ理詰めの強要を感得するのみである．(4)に於いては“please”を付加することによって話し手の聞き手への敬意を看取できるが，「頂戴」という絶妙な味が訳出されているとは到底感じられない．(3)の“It's time to get up.”も理詰めの観を呈していると言える．(1)〜(4)も，また先の「帰る」の場合も，全てが話し手の話す抑揚に依拠して意味の差異を表現するのであるが，その点は英語に於いても同様であることは述べておかねばならない．しかし，日本語の場合表現された言葉の中だけでも話し手と聞き手の情報が漠然としてではあれ，極めて多く詰っているのである．

(1)〜(4)への口語表現の英語への訳出は，先の「帰る」の例とは異なり多様な表現とはなっているが，それでも一部を除外して話者，聴者の微妙な相互の関係を示唆するところまでは全然到達し得ていないと言えよう．

さらに，いま一つ別種の表現を対比してみる．

(1)　「どこへ行った？　ねえ，どこへ行った？」（p. 128）
　　“Where have you been? Tell me where you've been.”（p. 161）

(2)　「ねえ，どこへいらしたの？」（p. 129）
　　“Where have you been?”（p. 161）

(1), (2)とわずかな時間の相違の中で話し手駒子が聞き手島村に行先を尋ねる場面である．(1)の「どこへ行った？」と(2)の「ねえ，どこへいらしたの？」が英文に於いては双方とも“Where have you been?”と訳出されている．これでは(1)と(2)の話し手の感情の動きが全く伝達されていないと言えよう．

(1)は島村がハイヤーで帰って来たところを駒子が窓ガラスに額を押付けて甲高く尋ねる場面である．ガラス越しという事情から声高に話す必要があることと車に飛付くほど行先を尋ねたい感情の高調のために相互の立場を冷静に表わす心的余裕を所持し得なかったものと言える．そのために心的関係を明示すべき箇所は最低限の考慮しかされておらず質問の核心を突き，より機械的になっているのである．逆に思考すれば，だからこそ話し手の必死の様子が感受し得る効果を生じているのである．また，このより機械的で粗暴な発言は，内緒で出掛けたことを責める意識が直感的に話し手に内在していたために心的に話し手が優位にあると感得されたことにより演じられたものとも推察できるのである．

しかし(2)に於いては，話し手が車に乗り込み，聞き手を眼前にしていることと落ち着きを取り戻してきたことのために心的余裕のある言葉使用へと変化している．話し手は責める権利があると感受していても両者のいわゆる「役割り」[8]が芸者と客ということと話し手が聞き手に心を寄せているという事情のために話し手は下手から敬意的に優しさを表出しなければならなくなっている．それ故に「いらした」という敬意的表現が使用されているのであると言えよう．

日本文では(1)と(2)との話し手側の心的状況の変化がその言葉の表現の仕方に表出されていたが，訳出された“Where have you been?”という英文表現にはその状況変化は全然表示されていない．ただ(1)に於いて，話し手の心の逸る有様が“Tell me……”と表現することによって訳出されているだけであるにすぎない．両者の立場は全く考慮されておらず，相互が同等の位置で扱われているのである．この微妙な表現は英語では訳出不可能と言えるであろう．

今まで取扱った全ての日本語表現は，一例を除き先の『文章読本』中の文章上達法通り主語が欠落しているが，これは必ずしも「日本語の伝達が主体と客体，われとなんじの関係を明確に規定する必要のない間柄に於いて行なわれて

きたことが多かったことを暗示している[9]」とは断言し切れないのではなかろうか.

確かに，一例を除外して，これらの諸例の中には「わたし」,「わたくし」といった主格のいわゆる「対象依存の自己規定[10]」が実践されてはいない，だが，主格の「自己規定」が実行されてはいないとは言え，前述の如く，主格省略の表現中には既に話し手としての主体と聞き手としての客体の微妙な立場関係が微細な表現手段によって言表されていたのである．しかも，駒子という話し手と島村という聞き手の不変の二者の関係であって，常時駒子側からの同内容の伝達表現であるのに，各々の状況に於ける相互の心的立場関係の相違が多彩に盛り込まれていたのである．このことは単に「わたし」,「わたくし」という，あるいはそれ以外の主体の「自己規定」や「あなた」,「あんた」という「対象規定」とは異なって，言語として表現されない中に別種の「自己規定」と「対象規定」が実施されているのも同然と言えるのではあるまいか.

そして，さらに重要なのは，主語を省略した述語中に話し手と聞き手の立場関係が，主格の対象依存によって発生する「自己規定」の「わたくし」,「わたし」よりも，また「対象規定」である「あなた」,「あんた」などよりも遙かに微細な点まで表現されているという点である．殊に，話し手駒子と聞き手島村の二者間に於ける話し手の「自己規定」は『雪国』全体の中でも「私」一つである．一定した二者間に於ける「自己規定」と「対象規定」は常に一定していると考えてもよかろうが，実際はその両「規定」が話し手と聞き手の絶えざる心的距離に対応して細かく述語部分に表示されていると言えるのである．従って，さらには「規定」不可能なことが述語部分に於いて可能となっていると言えるのではないのだろうか.

ところが一方，英文に於いては補足された主体“I”は(一部を除くが)固定している上に，動詞に於ける微妙な変化は一切見受けられない．聞き手と話し手の立場関係は，一部を除外すれば全く考慮されていないのである．日本語に於ける一定した二者間のこのような多様な表現形態は，不定な二者間であればさらに複雑な表現形態を形成するものと推察し得る．そうすると日本語と英語との間には，話し手と聞き手の心的関係を表現するのには極めて大きな相違が存在

すると考えなければならない．片や相互関係の表現法が豊富であるのに，片やその表現法が殆んど存在しないと言ってもよいほどなのである．英語の場合，大味な敬意表現の使用法は存在しても，日本語のように目紛しく変化する表現を考慮する習慣が希薄であると言ってよいであろう．

だが，このような人間関係の表現法は，主格省略の文章中では不充分にしか語れない．そこで次に，『雪国』を離れた一例文を挙げることによってさらに詳細な分析を試みてみたい．

III

井上ひさし著『私家版日本語文法』の中に「……職業や地位を表わす語や親族の概念を含む語を合せて，日本語の代名詞は，常に相手と断絶状態におちいるのを防ぐことを主たる目的として用いられているのではないか……」と話し手と聞き手の関係を述べているが[11]，日本語では代名詞以外の部分をも，つまり英語の動詞に当たる述語の箇所をもその目的のために用いていることを先に指摘した．しかもそれは心的立場関係に微妙に反応したことを勘案すれば，代名詞以上に機能していると言ってもよいものであった．だが，話者と聴者が相互に一定した人間でなければ，主体と客体の組み合わせは多様になるので，話者と聴者の関係を表現の中に見るには主体と客体を表示する代名詞をも含めた考察が必要であろう．

一例として次のような英文を取り上げてみる．

I will give it to you.

そしてその訳例のいくつかは次のようなものになるだろう．

(1)　さしあげましょう．　(5)　さしあげますわ．
(2)　さしあげます．　(6)　あげるわ．
(3)　あげましょう．　(7)　やるわ．
(4)　あげます．　(8)　あげるよ．

(9)　やるよ.　　(11)　やっちゃうよ.

(10)　やるぜ.　　……

これは動詞の部分のみの訳例であるが,その訳例から話し手と聞き手の関係は,先の『雪国』の場合とは異なって一定してないとしても,両者の性別,地位などが漠然とながら想像し得る[12].そしてまた,この場合話し手"I"と聞き手"you"とは訳出されないのが普通[13]であろうが敢て訳出すれば,複雑な組み合わせができる.

例えば(1)の場合,「わたくしがあなたにそれをさしあげましょう」と言えなくもない.同様に(1)〜(4)は一般に「わたくし」,「わたし」,「僕」等と地位や身分の比較的高い者が主体となる場合や丁寧な言葉使いをする場合に使用される.また対象者には「あなた」や「君」が適当と考えられる.そして(5),(6),(7)は一般的に見て,主体が女性であることが終助詞「わ」の付加されていることから推量できるので,主語は「わたくし」,「わたし」等が,また(6),(7)は極く限定された形で「あたい」等が使用されよう.一方対象者は(5),(6),(7)とも「あなた」が妥当であろう.(6),(7)は,「あんた」等が使用されてもよい.そして(8),(9)は身分,地位などに拘泥せず話者,聴者が親しい場合,聴者が話者にとって気遣わずによい存在である場合に話される表現であると考えられる.従って,話者は「俺」とか「僕」,また「わたし」等が充当されよう.そして聴者は「君」,「おまえ」,「あんた」等と対象規定され得る.また,「あなた」等と規定されることもある.(10),(11)になると話し手はかなり粗暴な発言をする者と判断してよい.それ故,主格に「わたくし」などは最も不似合いであり,必然的に「俺」等という表現になる.また対象者は「おまえ」,「あんた」,「おめえ」等と粗野な言葉が妥当であろう.

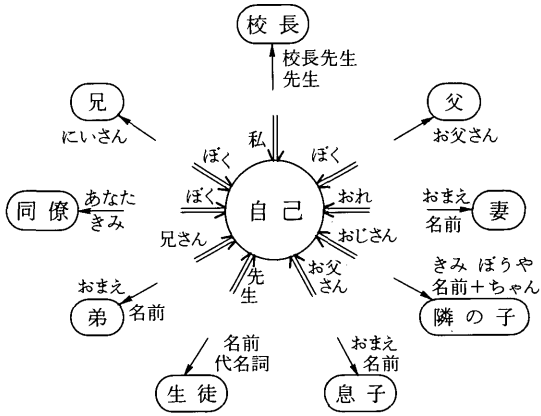
"I"と"you"に適合する訳語を選択してみたが,この"I"と"you"はさらに多様な訳語が存在する.従って,その組み合わせはさらに複雑になると言える.日本語はまず話し手の側で聞き手との心的距離を把捉し,「自己規定」と「対象規定」に依拠してそれぞれの呼称を決定する.そしてさらに英語の動詞に相当する部分で各々の呼称に適合する形を選択してゆく.しかも先に明示した如くこの動詞に相当する部分で話し手と聞き手の呼称決定より子細に変化してい

くのである．会話はこの一連の組み合わせが一瞬にして連結されなければいけない．

ところが，英語はこの一連の語の選択に手間を取る必要が極めて少ない．なぜなら話し手の自己は規定以前に決定しているし，聞き手の“you”も選択し得ない決定要素であるからだ．“I”も“you”も日本語とは異なって，その中に相互の心的距離を示唆する情報は微塵も内包されていない．動詞に於いては多少の変化が可能であるが日本語のような多彩な変化は認められない．従って，英語の場合話し手は日本語の場合ほど自己と相手の関係に捕縛されることが極めて少ないと言えるのである．

問題はまだある．この一例を考察しただけでも，日本語の話し手と聞き手の呼称，また動詞に相当する部分の子細な変化は多彩で，その組み合わせは複雑さを極めていた．だが，実際には，主体と客体の呼称はこれに止まることはない．

日本語と英語の構造の根本的な相違を考慮して，人称代名詞を親族名称及び地位名称と一括し，話し手の自己呼称をいわゆる「自称詞」とし，聞き手の呼称を「対称詞」とすると，日本語と英語の話し手，聞き手の相互関係への配慮の仕方は雲泥の差を示す[14]．下図は『ことばと文化』(鈴木孝夫著)の中に提示された「自称詞」と「対称詞」である[15]．モデルは年齢40歳の小学校の教員である．



同一人物に対し二つ以上挙げてあるものは，場合により使い分ける言葉とさ

れる．この例の場合，「自称詞」は「わたくし」，「ぼく」，「おれ」，「おじさん」，「おとうさん」，「先生」，「兄さん」の７種類使用されている．また，「対称詞」は「あなた」，「おまえ」，「きみ」，「おとうさん」，「にいさん」，「先生」，「ぼうや」等である．無論，これは断り書きがあるように全て網羅的に記録したものではないので対話の範囲を拡大すればこれ以上存在する．さらに，このパタンはさまざまな職業，年齢，地位，また性別等に依拠して各々の「自称詞」，「対称詞」が存在する．従って，話者，聴者は膨大な数の組み合わせからの選択を余儀なくされるのである．

先の“I will give it to you.”の中の“I”と“you”を敢て訳出してみて，確かに一人称，二人称の代名詞の数は英語より多いことが理解できるが，現代日本語の場合，その一人称，二人称は「実際には余り用いられず，むしろできるだけこれを避けて，何か別のことばで会話を進めていこうとする傾向[16]」がある．また，数多く存在する「自称詞」，「対称詞」も上下の対立概念を基本とする規則が存在するとされる[17]．だが，この二点を考慮しても，英語と日本語の「自称詞」，「対称詞」の使用には極端な相違が瞥見できる．英語の場合，「自称詞」，「対称詞」が若干存在するにしても，圧倒的に“I”と“you”の相称的な相互変換で行われていて，日本語とは比較にならない．英語は通例抽象的な話し手の役と聞き手の役しか明示しないでも対話を進行させていくことが可能なのである．これは西欧の言語学に「自称詞」，「対称詞」の問題が取り上げられたことがなかった事実からも裏付けることができる[18]．

さらに問題なのは，日本語に於いて「自称詞」，「対称詞」が前述の如く目上と目下の対立概念が基本になっているという事実である．目上と目下の対立概念が基本となっている以上，その使用には誤謬が許されない．自己乃至は相手の体面を傷つけることになりかねないからである．そのため我々は「話の相手が誰で，自分に対してどのような地位，資格を持っているかを見きわめた上で，その場に最も適切な言葉選び[19]」をしなければならないのである．

そして前述の如く，「自称詞」，「対称詞」の決定後は英語の動詞に相当する部分の適当な言葉選びもしなければならない．従って，この三者の組み合わせだけでも極めて煩雑な作業となる．この作業はほぼ無意識の領域で処理されるこ

とではあるが，英語と比較すれば話し手は多大な負担を背負い込んだことに等しいと言えないだろうか.『日本語の論理』(外山滋比古著)の中にも次のように示されている.「学校の教師と学生，生徒という，親密であるべき間柄においても，第一人称と第二人称の調節がうまく行かないために，思ったことが言えない．ひとつ歯車がくいちがうと，その断絶を埋める言葉がなくなってしまう．話し合えば話し合うほど溝はふかまるということになる．面と向かっては思うことが言えないから，手紙で書いた方がよく気持が伝えられるということが，こういう至近距離における人間の間には案外多いものである.[20]」

従って，次のようにも言える.「日本人の口下手は語彙の少ないためではないと見ていい．やはり，文の組み立てが思うようにいかないのだ…….[21]」

確かに，三者の組み合わせは非常に複雑である．英語が殆んどその組み合わせについて神経を用いる必要もないのに反して，日本語は過大視すれば数カ国語分の言語組み立てを行っているほどの神経遣いをしていると言えよう．このような神経遣いは常時行われているが，それを意識せざるを得ない場面に遭遇するのもしばしばである.

例えば，講義や講演の際，学生や聴衆の他に講演者や，講義を行う者の同僚や先輩がいる時等である．この場合，話し手は非常なやりにくさを感得するものである．これはいわゆる「役割り固定[22]」から抜け切れないのが主原因であろうが，その他の原因の一つには，聞き手と話し手の照準が絞り切れずに動揺して三者の組み立てがうまく行かずに迷ってしまうことが挙げられるのである.

あるいはまた，職場に妻が現われたり，電話をかけてきたりするのも同様の状況を招来する．従って，そのようなことを極力拒否する人も多くなる．職場の人間関係と夫婦の関係とは相容れないもので三者の組み立ては困難を極めるものと考えられる．しかも日本人の場合，言葉上に限らず態度も自己規定に適合した形で現出されるため自己の対応は全てに於いて目紛しい変化を要する．その際の動揺は極めて多大であると言い得よう.

かくして，話し手と聞き手に関わる口語表現には，その煩雑さの故に会話の円滑さを欠く場合が存在すると考えられるのである.

IV

日本語の口語表現では，先の三者の組み合わせは英語に比較して問題にならぬほど煩雑であった．だが，会話の円滑さを妨害するものがまだ存在する．それは三者の組み合わせと話し手の態度が聞き手の心情を損ねぬよう気遣うということを基盤としていることである．気心の知れ合った者同士や家族内の上位者が下位者に話す場合等を除外すれば，その気遣いは主体者の心の大部分を占拠していると言わざるを得ない．この主体者の気遣いは，相手の好意を失いたくないという気持から生ずるものと考えられる[23]．例えば，日本人が御礼の意を表わす際，「すみません」と述べるのも御礼より相手の心情を推察して負担をかけたことを詫びているのだと解釈できる．それは紛れもなく相手の好意をそのまま捕えておきたいという気持の表われを示すものである[24]．日本人は話したいことを話すより，むしろ聞き手の感情を害しないようにすることの方にこそ気遣っていると言っても過言でないほどである[25]．それ故に「日本語ということばはどうやら情報の伝え合いを目的とするよりも，むしろ人間としての肌のぬくもりを交わすための手だてという面が強いらしい[26]」という見方も生ずるのである．従って，相手の出方，他人の意見等に自己の考えを如何に調和させるかということが話し手の大きな問題となっていると考えられる．このような状況下では話し手が自由に意見を発するのが可能であるかは疑問であって，話し手は絶えず精神的ストレス下に放置されていることになる．そして主体者は常に自己の意見を極力抑制することに努力しなければならない．自己抑制が大切になるのである．たとえ意見を述べるにしても断定的な表現を回避し，如何様にでも解釈できる話し方をするのもこのような点に原因があると言えよう．また，目上の者に「あなた」と言えないことや間接的表現に託す象徴技巧や諷喩の技巧による表現が発達しているのもそこに原因が隠れていると考えられる[27]．

一方，英語の口語表現に於いてはごく一部の敬意表現を除いて，聞き手の心情を損ねないよう心掛けなければならないという状況は存在していない．ヨーロッパ諸語の一人称，二人称の代名詞が数千年の歴史を持ち，英語もこれと同

様一人称“I”と二人称“you”の表現は長い間不動の存在であって[28]，相対的に変化するという習慣は全く存在していない．それ故，主体者が相手の感情を害せぬ気遣いをせねばならぬような言語構造にはなっていない．それは日本語が有史以来自分を指す代名詞と相手を指す代名詞が次々と目紛しく交替してきたのとは対照的である．従って，英語の場合話し手“I”は，聞き手“you”の身分，職業などを考慮することはなく，単に合理的な聴者としてのみ把握しているにすぎない．また話し手は聞き手との心的距離によって多様に変化することはなく，厳然として不動のままである．“I”と“you”は相互に合理的な関係でしかないと言えるのである．動詞の部分は，前述した如く多少の敬意表現を表出し得る余地を所持していると考えられるが，それでも話し手と聞き手の心的距離に即応して変化するほどのものではなかった．これらのことから英語の場合は，三者の組み合わせから判断しても話し手が聞き手に対して感情を損ねないような繊細な言語表現ができ得るようにはなっていないと言えよう．すなわち主体者の感情を移入する余地が極めて少ない言語構造であると言えるのである．話し手や聞き手の態度には変化が現出してもそれが直接言語の形式なり表現法なりに現われることは少ないのである[29]．話し手は相手の感情に立ち入る必要はなく，自分の話の内容に心を集中しておくことができるのである．従って，普通話し手は初対面の人物に対してもおよそ子細な感情を動かすことなく，殆んど合理的，機械的に応対することが可能となるのである．そしてまた，主体者が極力自己の意見を抑制するという習慣も生じてこないのである．

英語の言語構造が感情移入を受け入れ難くしているために主体者は気分を二分する必要はなく，日本語の主体者に比べ心的余裕を獲得しやすくなっている．従って，話し手は論理の展開と相手の説得に力点を置くことが可能となるのである．一方，日本人は論理の展開や説得よりも相手の感情に適合させることに大方の努力を傾注している．日本人には相手を説得しようとするところまでの気力が内在していないように感得できるのである．

英語は構造上，感情を抜いた議論を可能にし，論理的，理性的に相手の意見の不備を衝いて議論を精緻にすることは当然のこととなっている．しかし，日本語の話し手の場合，「相手が意見を出すと，たとえそれに反対であっても，何

となく反対を出しそびれて，口さきだけの賛成をしたりする．あるいは逆に，ろくに議論もしないで，感情的に喧嘩腰になる．」[30]日本人のディベートを不得手とする[31]のも日本語の構造が感情移入を基準にして形成されているからであると考えられる．この人間関係への気遣いが主体者に極度な重圧を掛けているのは明白と言わざるを得ない．

だが，その気遣いが比較的軽減される時も存在する．家族内は勿論であるが，同僚や親友等気のおけない仲間同士との会話の場合である．主体者は客体の身分や職業に神経を使う必要もなく不動の「自己規定」と「対象規定」を基盤として会話することが可能なのである．会合や上司の前で発言をせぬ者も，また教師の前で口を開かぬ学生も仲間の中では突然饒舌になるのも珍しくない．これは仲間としての絆が既に完成していて多少の無礼も許容されるという安堵感があるためであろう．また規定の自己と相手を含める三者の組み合わせが目紛しく変化することがなく，話し手にとって負担と感ぜずにリラックスできることにもよろう．しかし，何よりも大きなことは，相手の感情の動きに注視し，気を損ねぬよう配慮する必要がないことによると考えられる．

しかし，親しき仲にも礼儀はなければならず，勿論構造上感情移入の余地の少ない英語の話者ほど人間関係の気遣いから解放されているわけではない．

日本語を話す者にとって，話者は聴者の気分を損ねぬよう努力を傾注することのみに止っているわけではない．聴者の気遣い以前に自己に相応しい姿勢を維持させねばならぬ束縛下にある．教師は教師然とした姿勢を持ち，上役は上役としての姿勢を保持せねばならない．そしてまた，各々が父親として，夫として兄としての姿勢を維持し，立振舞をする．話し手は自己の取るべき姿勢と聞き手との感情の動きから前述の三者の選択はなされなければならないのである．

初めてメーキャップを施した時や服装を新調した時，サングラスをかけた時，はたまたダンプを運転するような時，主体者の取る姿勢は時に大胆な変転をする．そしてそれは言語表現の中にも大きな変化を表出するのである．こういった事実は，主体者がそれだけ自己の「役割り」に束縛されている証左となるものである．

このように日本語は主体の変化，客体の動きに即座に連動して微妙な表現を生みだす．それはそれだけ話し手にストレスが掛かることを意味しているのである．

『異文化のかけ橋として』(国広正雄著)の中に次のように述べた箇所がある．「例えば英語と日本語とを比較してみますと，同じことを表現するのに必要なことばの量は，日本語の方が時間にして1.5倍近くはかかるということがいえそうです．これにはいろいろな理由が考えられますし，現に計量的な調査もいくつか行われていますが，一つには日本語が情緒度が高く，それとは逆に抽象度が低い，ということが言えそうです[32]．」日本語が英語よりも1.5倍近くかかることの一つの理由が日本語の情緒度の高さにあるとするなら，その中に対人関係に於ける気遣いから発生する言語構造の煩雑さも含めてもよいのではなかろうか．

V

前章に於いては，三者の組み立ての選択の際に聞き手の感情を損ねない配慮を話し手が行うことを述べたが，話し手が聞き手に調和させるが如き言葉表現をするには聞き手の動向を漠然と把握するだけでは不足であり，可能な限り精確な注視が必要となる．

英米人は「人間同士ほんとうにわかりきることなどしょせんは無理と決めてかかっているらしく[33]」日本人のように聞き手の感情を問題とはせずに内容と論理の展開に対する反応に注意を向ける．だが，日本人は聞き手を自分と対立する存在，あるいは理解不可能な存在と見做すことはせずに自己を拡大し，聞き手を包容することにより自己内に取り込める対象と判断することで関係を維持しようとする．それ故に，同一化が可能になる程度まで相手を充分に把握しなければならない．従って，当然相手の身分，地位に多大な関心を示すし，相手の顔色をも読む．換言すれば，常時相手を観察していると言ってもよかろう．

初対面の場合，名刺の存在は日本語が音声中心の一元的言語ではなく表意文字と表音文字とを共に使用する二元的言語であることから相手の氏名を適確に

理解するのに必要であるとする見方もあるが[34]，会話者同士の相互の煩わしい観察を未然に回避する役割りも所持しているのではなかろうか．すなわち，会話者同士の第一の関心事項が相手の観察であることを公然化し，その上での会話進行の円滑化をはかった産物と見做せないかということである．

話し手相互の観察の煩わしさへの意識は，会話者同士の直視回避と大きく関わっていると推察し得る．前述の如く会話は終始相手を観察しつつ，相手の心的変化に調和させて行われるのであるが，その観察は聞き手の「座標[35]」上の位置に関わること，すなわち話し手との心的地位関係に関わることであって，聞き手には自己の対面に関係することである．従って，聴者は話者の自己評価に敏感にならざるを得ないものと推察し得る．相手の自分に提示する敬意の度合いが決定されるからである．そのために，話者の観察の露骨さは許容されるものではなく，とんでもない方を向いて「あなた」と言わねばならぬのである[36]．直視は即，相手評価と連結され，無礼なことと判断されるものと考えられる．

だが，「あなた」に視線を向けながらも相手の観察を続けるという二律背反の中で話し手は聞き手の心情に調和した表現を選択する．会話者は交互にこの手順を踏みつつ話を伸展させるのである．従って，相互に観察者であり，また非観察者でもあると言える．話し手はこの意味で，観察されている事実にも意識を働かせることになり，これは気弱な話し手にとって，言って見れば監視されているも同然で緊張度を増大する結果にもなるのである．

話者，聴者という相互の心的関係に於いて，話者は聴者を充分に観察し，その観察に過多でもなく過少でもない敬意度を表示する表現を選択し，前述の三者を決定付けねばならない．さらに，聴者の〝監視〟のもとにありながら話者の選択した「座標」上の位置が相手の感情を損ねぬよう子細に感受し，揺れ動く相手との心的距離に準じて表現法を適確に調和させてゆく繊細な作業も行ってゆく．その上また，今度は聞き手として自己の対面に関わる相手の敬意度にも多大な関心を表出するのである．

英語の口語表現に於いては，ヂェスチャ表現，論理への執着などに例証される如く，無論，日本語での口語表現の場合とは異質の範囲で話者，聴者の気遣いを招来する事実はある．だが，その点を考慮しても，話し手と聞き手の心的

関係への気遣いとその周囲とに範囲を限定すれば，英語の口語表現の場合とは比較し得ぬほど話し手は厳しい状況下に置かれている．話し手は身動きの取れぬいわば〝がんじがらめ〟の状態になっているという感じがしないわけにはいかない．

だが，実はこの〝がんじがらめ〟はここで完了するわけではない．日本語の文自体から話の順序，そしてその内容に至るまで波及していると考えられるのである．

VI

論文やエッセイの中には近年結論から書き出すものが増加しているが，そのスタイルは日本古来のものとは言えない．多くの学問の基盤が欧米にあって，研究スタイルが欧米流であることが多いことと翻訳文化に依存してきたことがその一因と考えられよう．

元来，日本語は動詞構文を主体とし，表現の重心や結論は文章の末尾，また段落の終末の部分に存在したものである[37]．だが，ヨーロッパ語を中心とした外来思想の担い手が名詞のため翻訳文体では文の頭部，段落の冒頭へ重心が移動したのである．

すなわち，「日本語の構造は富士山型で下へ降りるにつれて重要性が高まる[38]」のである．それに反し，ヨーロッパ語の構造は逆さ富士型であり重要なことは前方に位置している．

日本語の構造の中には結着を末尾の部分まで延引しようとする話し手の聞き手を意識した姿勢が看取できる．実際，会話に於ける導入は，まず両者の感情の移入し難い気候の話などに求められるのが一般的であって，それから両者の近況へと話が移行する．そこには相手の様子を窺う姿勢が存在すると言ってよい．雲行きが怪しければ問題の核心に入らずに済んでしまうこともあり得る．様子がおかしくなければ，徐々に核心的な問題へと話が伸展する．電話のやり取りでも手紙の書き方でも同様の傾向が見られるが，無論，全てがこのような順序立てであるわけではない．

このように話の核心を可能な限り後部に回して相手の様子を窺うが如き会話の構造は，先の指摘の如く文自体の構造の中にも現出されている．次にその二つの例を挙げてみる．

(1) 「もし差しつかえなければ私がその書類を取りに行きますよ．」
(I'll go and get that paper, if you don't mind.)

(2) 「彼が東京にいるときに彼に会いますよ．」
(I'll meet him when he is in Tokyo.)

日本語の話者は，"if you don't mind"や"when he is in Tokyo"を文頭に配置する傾向があるが，ノーマルな文の頻度としてはその逆の組み立ての方が多い[39]．何故なら，英語の場合重要な部分を先に述べ，その後は補充説明的に次々と補足してゆくのを原型スタイルとするからである．

そう把握してみると日本語の文構造は,「もし差しつかえなければ……」とか,「彼が東京にいる時……」等と述べて直接核心を表現せず，婉曲に核心に触接する形態を保持している．この構造はやはり話し手が聞き手を意識してその様子を窺う姿勢の証左と解釈できないだろうか．

そう解釈できるとすれば，日本語の場合文から始まり，段落そして話の内容全体に至るまで聞き手の機嫌を損ねぬような気遣いがなされていると言えるのである．次の国広正雄氏の言に話者の気遣いの一端が窺える．「日本では……ひたすら相手に脅威を与えないよう,知に働いて角がたったりしないよう,『実力』以下に落としてしゃべるコツを体得しなければならない[40]．」相手に「脅威を与えないよう」とは聞き手の機嫌を損ねぬようにする配慮も含蓄されているのであり，単に無能を演ずるということだけを意味するのではなく，聞き手に過分の気遣いをすることをも意味しているものと解釈し得る．

このような話し手の一連の気遣いが前述した複雑な気遣いと相俟て，話すべき主体を徹頭徹尾聞き手を意識させる状況下に置かせて，先の〝がんじがらめ〟を一層強固なものにし，話し手の口を封じてしまうほどにまでなっているのではないかと考えられるのである．たとえ，この気遣いと言葉の選択等は，大方が無意識下で行われることであるとしても，日本語の話し手のような〝がんじ

がらめ″下にない英語の話し手とは置かれた状況が極度に異なっていると言ってよいだろう．従って，話し手は自己の話への心的集中の他に，聞き手への気遣いと調和という過重の負担を負わねばならぬのである．自己を大きく二分する火種を内包して，話そのものへの集中力を分散させられる破目に陥っているとも言えよう．このようないわばハンディを抱えた話し手は，実際の会話に於いてどのような状況を招来するのであろうか．

VII

米国や豪州など英語圏に住む人達は，帰宅後でも夫婦共にパーティーや種々の会合を楽しむことが多い．だが，日本の場合個人差はあろうが，このような習慣を持つ者は少ない．たとえ，そのようなパーティーが存在したとしても仕事から戻ってまでと考えるのが本音であろう．海外駐在員達にそういった場面に遭遇する者が多く見られるが，やはり内面ではそれを苦痛と把捉しているものが多いと考えられる[41]．では何故それを苦痛と感受するのであろうか．日本人の中に存在する「ウチ」と「ヨソ」という意識の兼ね合い等種々の理由が内在すると考えられるが，その中に言語の使い分けを含めて人間関係上の気遣い，煩わしさを挙げることができるのではなかろうか．仕事での疲弊の後に前述の如き会話上の気遣いではストレスの上塗りになる．言葉使いや態度に至るまで気遣いから解放されぬのは苦痛以外の何物でもあるまい．パーティーは心底楽しめるものとは考えられていないのではなかろうか．

また日本では普通の結婚披露宴でも祝賀会でも着席したテーブルの知らぬ者同士が皆で談笑する場合が時に見られるのではあるが，常に見られるという光景ではない．オドオド，ドギマギしがちなのが日本人だと判定されている[42]．知人同士なら別だが，両隣や前の人達と無難な話ができればよいところであろう．立食パーティーならさらに顕著で，パーティーの途中から隅々に黙している者が必ず幾人か出る．見知らぬ者の中に参入し得る雰囲気が存在しないのである．またそれに加えて知らぬ者との会話を続ける自信も無い．終始緊張せねばならぬのは耐え難いもので，できることなら回避したいであろう．

さらに，知識人による座談会を見てみる．概ねそこでは寡黙な面は看取できない．だが，その座談内容は速記したままでは支離滅裂な場合が多く，相当改変せねば掲載できない[43]．如何に会話に整然さが確立していないかの証拠ともなる．無論，言文が一致していないことがその主たる原因となるのであろうが，座談者が前述の如く相互に気遣うため，話の重心が揺曳し，そこに一貫性が欠如し易いということと話し手の心が二分され，話の核心への集中力が阻害されるということもその原因となるものであろう．

その他，社交面に於いて上述の如き例は枚挙に遑がない程度に存在する．そこには言葉の媒体を通じて実践される社交性に何らかの不足な面を現出する場合と言葉自体に変調をきたす場合との両様が見られる．そしてそれらを招来するもとは各々存在するであろうが，いずれにも話し手を拘束する〝がんじがらめ〟的状況が一因になっていることは否定できまい．

従って，このような現実の社交面に於ける状況から判断すれば，日本語不完全論が台頭するのも当然と思われるのである．少なくともこの状況を欧米の場合と比較した時には，その不完全論を側面から支持する形を取ることになってしまうであろう．

だが，ここで我々は日本語不完全論とするその不完全論は，如何なるものを基準として不完全とするのかを振り返ってみる必要があろう．日本に於ける社交面のこのような状況は，必ずしも不完全論に連結し得るとは限らないからである．

Ⅷ

そもそも日本語不完全論が登場するに至ったのは，始めに記述した通り，西洋文明の決定的な優位の認識を発端としていた．そして，日本人に付帯する外見的な消極的一面が欧米人との比較に於いてその存在に到達し得ないという不満がその不完全論を側面から支持するものであった．このことはすなわち，その不完全論の不完全とは欧米を基準とするものであったということを意味している．

確かに日本人には社交的な面や会話の面等に於いて欧米人とは極めて異なり，消極的と規定される面が多数存在するといえる．そしてその消極的状況を招来する一因に話し手の〝がんじがらめ〟の立場があることを見てきた．

だが，その社交的な面には欧米人に於けるのと同様の積極性が必要なのだろうか．もし積極性が必要なら，それは欧米的積極性でなく，日本的積極性ではあるまいか．日本には日本独特の地理的条件，気候的条件，歴史的条件等が存在して，その条件の中から日本独特の慣習も発生してきたのである．それを欧米を基準として批判するとなればその諸条件の一切を無視してかかることに等しい．脱亜入欧的欧米謳歌を基盤とする視点から日本人の気質を判断するのには無理があろう．欧米という郷に入っているわけではないからである．

問題は日本という郷の中に基準を設置し，その視点から現代社会に於ける日本人の気質やその気質形成の一要素である言語等を判断することであろう．日本語が不完全か否かというのは，非社交的，口下手という日本人の所持する一性格とそれを招来する言語が欧米の社会にではなく日本の現代社会に適合しているか否かを見ることであろう．

そこで，そのような新たな視点に立って日本人の非社交的，口下手な性格を見てみると，それでもやはりそれらの性格は日本の現代社会に適合した性格とは必ずしも言えないと言わざるを得ない．日本という風土と日本語という言語から形成された当然の性格とは言い得ないと思われるのである．

無論，これまで指摘してきたように，口語表現の中に見られる話し手としての主体を拘束する〝がんじがらめ〟の状況は厳しく，言うなれば一種の〝金縛り〟の状態に主体を陥れるが如き状況を産ずるものであった．そして日本の地理的，気候的，歴史的諸条件の中から誕生した村的社会がその〝がんじがらめ〟の言語表現を有史以前より一貫して保持してきたのである．従って，〝金縛り〟に陥っている主体は外見上ロベたであり，社交性に欠けるのも当然に見えるものであった．

その上，〝金縛り〟に陥った主体をさらに厳しい状況が包囲している．日本的村的社会は等質文化を招来し，会話の不要性を高め，話し手自身の存在を危うくしているのである．話し手と聞き手の両者は，相互に同質的基盤に立脚すれば，

言葉という虚構的な伝達手段よりも接触によって相手の胸中に立ち，察知，感得することの方を重視するのは必然であろう．事実をそのまま伝達し得ぬ言葉の内包する宿命の故に言葉より事実を相互に感得するのが確実である[44]．これでは話し手としての主体は育成され難い．

また，さらに話し手としての主体を育成し難くしているものの中に言文不一致に基づく言語感覚の分裂を挙げることができる．目の言葉と耳の言葉の二元論に立脚する二つの言語が存在するのである．そのため，我々の言語能力は二分化されていると言えるのである．この点は言文一致の欧米とは正反対である．しかも，日本語は現実には文体が優先されているのである[45]．

これらのことも考慮に入れれば，〝金縛り〟に陥った話し手としての主体が頭をもたげる余地は全く存在していないと言える．従って，日本人の性格の現状が寡黙であり，非社交的なのは当然の結果と考えられなくもない．

だが，その性格の現状は現代の社会形態から見れば実は当然の現状とは言えないと考えられる．急速な欧米化を遂げた明治期以前の社会に於いては，日本の置かれた諸条件中より発生したこのような日本人の性格はその村的社会に適合していたものと考えられる．だが，明治期を基点として社会の諸制度，諸組織は近代化され，拡大化され，生活形態は大転換を遂げてきたのである．従って，単なる村的社会の小規模な内々の人的交流では対処し得なくなってきた．社会の拡大と活発化に伴い人的交流も拡大し，ウチとヨソの者とに拘らず接触の頻度はその度数を高めたのである．従って，村的社会に於ける村社会向け日本人の性格も当然変様せねばならぬものであったと考えられるのである．

しかし，その変様は社会の大転換とは全く歩調を異にし，旧態依然としていたと見てよい．何故なら，中根千枝氏の指摘の通り，社会人類学で言ういわゆる「社会構造」が，社会形態とは裏腹に全く変化せずにいたからである[46]．従って，如何に人間関係が拡大し，身内以外の他人との接触の機会が増加しても，ウチとヨソ，上と下という日本人の内部に従来から所持されている意識構造は変化がなく，先の〝がんじがらめ〟の日本語構造を支え，共に話し手を〝金縛り〟の状態に置くのである．

しかし，このようなダイナミックな社会に〝金縛り〟にあった話し手は，ど

う判断しようとも，調和し適合しているとは考えられない．人的接触に円滑さが欠落していると考えられるのである．すなわち，社会形態の発達に対し口語表現を媒体とした人的交流に遅滞が見られるということである．社会の諸システムの活力と人間関係とが異常なアンバランスを呈しているのである．人前に出て話がどもる．改まると口ごもる．これでは明らかなギャップと言わざるを得ない．

問題なのはこのような活動的な社会にありながら，人間関係の基盤が村的な「社会構造」の中に存するという点である．社会の変化に対応して人間関係の在り方が変化して行かなかった点にあるのだ．さらに言えば，人間関係の基盤が村的な「社会構造」の中にあるのは自然発生的であるが，このように拡大した社会形態の中では，人間関係の基盤を村的な「社会構造」の中に置くだけでは賄い切れないことを見落しているのである．その賄い切れない点が〝金縛り〟にあった話し手の口下手，社交下手となって人的交流に支障をきたしているのである．

この話し手を救済するには，話し手を〝金縛り〟から解いてやることが必要であろう．とするとそれは鍛練という教育的手段が最良の手であると考えられる．しかし，明治期以後の言語教育を見てみると，そのような賄い切れない点が全く見落されていたと推察せざるを得ない．

昔から読み，書き，ソロバンと言われるように日本の教育の中に話し言葉を重視する姿勢は存在していなかった．先に提示した如く日本語は話体と文体との二元に跨っているが，国語教育に於いて重視されてきたのは常に後者の方であった．話し言葉の鍛練はおよそなく，話し方は全く自然の洗練に任されてきたのである．現在でも，話し方，聞き方の教育が実施されてはいても実際には話体と文体が区別されず，話し方でなく読み方の練習になってしまっていることが殆どであると考えられる[47]．これは，話を手段とする人間関係の基盤を村的「社会構造」の中に委ね切った姿勢であるとしか言えない．確かにこれではダイナミックな現代の社会の中では話し言葉が対応できるものではなかろう．話し手としての主体は，村的「社会構造」の中から脱出できぬままなのである．

明治期以後，確かに日本語不完全論として日本語の現代社会との不適合性を

感受した動きは存在していた．しかし，残念なことに，それが漢字廃止，ローマ字使用，欧米語への転換等といった方向に進んで行ってしまったのである．このような方策では拡大複雑化された日本の社会に於ける人的接触に円滑さを招来する妙薬にはなり得ない．書き言葉を通してでは補足し得ない話し言葉の重視こそが必要であったのである．

言文一致の英語に於いてでさえ，話すことへの訓練は徹底している．ピーター・ミルワード神父(Peter Milward S. J.)はその著『イギリス人と日本人』の中で「イギリス人は，子供のときから雄弁と朗読の訓練を受ける．イギリス人は……おしゃべりな国民である．それにひきかえ日本人は，われわれが結果から判断するかぎりでは，沈黙の訓練を受けているように見える」と述べている．[48] 言文不一致という話す言葉から見てハンディを負う我が国に於いてこそイギリス以上の話すことの訓練を必要とするのではないだろうか．しかも，そうあってこそ，〝金縛り〟にあった話し手としての主体を，〝がんじがらめ〟の中から脱出させ得るものと考えられるのではなかろうか．

話し手が〝金縛り〟にあうのは，話し手を絡む〝がんじがらめ〟が〝がんじがらめ〟にあっていると半意識的に把捉して，その〝がんじがらめ〟に囚われるからに他ならない．従って，この半意識を無意識の領域に持って行けば話し手は〝がんじがらめ〟を意識しなくなると考えられる．しかもそれは同時に〝金縛り〟からの解放も意味する．話し手が無意識の領域に入ることができるのには訓練しかない．この訓練こそ教育のなせる業であった．教育に於いてこれがなされてこそ初めて日本語の話し言葉が本来の話し言葉として活躍するものと考えられるのである．そしてまた，そうしてこそ会話にも円滑さが生じるのである．

だが，この訓練は欧米に於けるが如き訓練では充分ではない．何故なら，前述のように我が国に於いてはその人間関係を不変の「社会構造」の中に基盤を置いているからである．従って，その〝がんじがらめ〟の状況は極めて頑強と言わねばならない．それ故その鍛練は〝がんじがらめ〟を脱出できるほど徹底したものでなければならない．そうなって初めて主体に余裕が生じ，会話にスムーズさが生まれ，口下手も非社交性も消滅し，人間関係にも円滑さが現出さ

れるものと考えられる．そしてまたその時にこそ話し手としての主体が育成されるのであろう．本来備わっていた話し手の主体が〝がんじがらめ〟のために表出される機会がなかったが，その時にこそ主体は解放されるものと考えられるのである．

だが，話し手が無意識的に〝がんじがらめ〟の日本語を操作し，主体を取り戻したとしても，それは欧米に於けるが如き様相を所持するものではない．なぜなら前述の「社会構造」と言語構造そのものが変化するわけではないからである．しかし，それでもやはり人的関係にはプラスとなる円滑さは招来されるものと考えられる．また，それこそが日本的スタイルをそのまま受け継ぎながら，日本的な人間関係を産出する手段となるものであるといえよう．

日本語の話体の充分な活用によって円滑な人間関係が招かれれば，話体は日本の現代社会にうまく適合し，それとのギャップが解消するのは当然と考えられる．それは日本的な形態で会話に積極さが生じ，話者の主体も日本的な形態で所持されることになる．そうなればもはや日本語の不完全性を支える根拠は喪失されることになってしまうのである．

IX

明治期以前の社会にあっては，話し手と聞き手の関係は，これまで論じてきたように話し手が聞き手との心的距離に対応した言葉の選択をし，常時両者の中に和を保持しようと努力することによって，話し手としての主体性を抑制しながら成立していた．しかもそのような気遣いをすることによって，話し手自身の主体を集中させずに内部に於いて分散させてしまっていたのである．なおかつ，社会そのものが等質文化に基づくものであるために口語の必要性を欧米の如く要求されることもなかった．その上，日本語が言文一致していなかったことは，話し手の話し言葉に慣れる機会が半分喪失される状況をもたらしていた．従って，話し手としての主体はほぼ抑圧されていたといえるのである．そしてそのようなことが，日本人の所持する口下手，社交下手を生み出すことになったのである．だが，それも日本の独特の地理的，気候的，歴史的条件から

滲むが如く形成されてきた村的「社会構造」にマッチし，その時点では〝不完全〟ではなくそれで充分であったと思われる．

だが，明治期以後は急速な社会形態の変化があり，人的交流の支障の回避のために話し言葉を中心とする人間関係の円滑化が望まれるべきであった．しかし，村的「社会構造」に人間関係の基盤を全面的に委ね切ってしまい，日本人の口下手，社交下手という特徴を，問題は如何に〝金縛り〟を解放するかにあったのに拘らず，日本語不完全論という問題へと責任転嫁してしまったのである．殊に，教育に於いて，話し言葉の重要視とその鍛練の徹底化が実施される状況下に置かれていたにも拘らずそれが実施されなかったところに，前述の日本人の特徴が顕著に現われた原因があると言えるのである．そしてそれが，現代の日本の社会形態の中であるべきはずの会話を媒体とした理想的な人間関係と比較した際に〝不完全〟と呼べるものになったと考えられるのである．

しかし，話し手が日本語の徹底した鍛練を経由して，〝金縛り〟から解放された時，日本語は充分に日本の社会に適合し，機能すると考えられ，話し手の主体性も引き出され得るものと思われる．また，それは日本語が〝不完全〟であるという主張の支えを突き崩すことをも意味するのである．従って，一歩踏み込んで，〝不完全〟なのは日本語という言語なのではなく，話し言葉としての日本語の徹底的な鍛練の方であったと言えるのではあるまいか．

〔注〕

(1) 外山滋比古『日本語の論理』中央公論社，昭和57年，253ページ参照．
(2) 鈴木孝夫『閉された言語・日本語の世界』新潮社，昭和57年，40ページ参照．
(3) 川端康成『雪国』川端康成全集第10巻，新潮社，以下この作品については各例の末尾にページ数のみ記載．
(4) 谷崎潤一郎『文章読本』旺文社，昭和58年，71ページ参照．
(5) 外山滋比古，上掲書175ページ．
(6) Yasunari Kawabata, “Snow Country”, Charles E. Tuttle Company, Tokyo 1982, p. 36.以下参照．以下各例の末尾にページ数のみ記載．
(7) 大杉邦三『英語の敬意表現』大修館書店，昭和58年を参照．
(8) 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波書店，昭和59年，180ページ以下参照．

(9)　外山滋比古，上掲書 49 ページ.
(10)　鈴木孝夫，上掲書『ことばと文化』195 ページ参照.
(11)　井上ひさし『私家版日本語文法』新潮社，昭和 56 年，59 ページ参照.
(12)　芳賀綏他『日本語と日本人』講談社，昭和 57 年，244 ページ参照.
(13)　D. キーン『私の日本文学逍遙』新潮社，昭和 56 年，22～23 ページ参照.
(14)　鈴木孝夫，上掲書『ことばと文化』134 ページ参照.
(15)　鈴木孝夫，上掲書 148 ページ参照.
(16)　鈴木孝夫，上掲書 133 ページ参照.
(17)　鈴木孝夫，上掲書 149 ページ参照.
(18)　鈴木孝夫，上掲書 178 ページ参照.
(19)　鈴木孝夫，上掲書『閉された言語・日本語の世界』185 ページ参照.
(20)　外山滋比古，上掲書 80 ページ参照.
(21)　田辺洋二『英語らしさと日本語らしさ』グロビュー社，昭和 56 年，182 ページ参照.
(22)　鈴木孝夫，上掲書『ことばと文化』193 ページ参照.
(23)　土居健郎『甘えの構造』弘文堂，昭和 54 年，28 ページ参照.
(24)　土居健郎，上掲書 28 ページ参照.
(25)　『言語生活』No. 386，筑摩書房，昭和 59 年，8 ページ参照.
(26)　国弘正雄『英語志向と日本語思考』朝日イブニングニュース社，昭和 56 年，76 ページ参照.
(27)　外山滋比古，上掲書 252 ページ参照.
(28)　外山滋比古，上掲書 141 ページ参照.
(29)　楳垣実『日英比較語学入門』大修館書店，昭和 55 年，84 ページ参照.
(30)　外山滋比古，上掲書 176 ページ参照.
(31)　松本道弘『ディベート入門』中経出版，昭和 57 年参照.
(32)　国弘正雄『異文化のかけ橋として』国弘正雄自選集 I，日本英語教育協会，昭和 57 年，174 ページ参照.
(33)　国弘正雄，上掲書『英語志向と日本語志向』129 ページ参照.
(34)　外山滋比古，上掲書 68 ページ参照.
(35)　鈴木孝夫，上掲書『ことばと文化』195 ページ参照.
(36)　外山滋比古『日本語の感覚』中央公論社，昭和 50 年，246 ページ参照.
(37)　外山滋比古，上掲書 87 ページ参照.
(38)　外山滋比古，上掲書 87 ページ参照.
(39)　田辺洋二，上掲書 44 ページ参照.

(40) 国弘正雄，上掲書『英語志向と日本語思考』43 ページ参照.
(41) 上掲書『言語生活』11 ページ参照.
(42) 国弘正雄，上掲書『英語志向と日本語思考』111 ページ参照.
(43) 外山滋比古，上掲書『日本語の論理』34 ページ参照.
(44) 鈴木孝夫，上掲書『閉された言語・日本語の世界』189 ページ以下参照.
(45) 外山滋比古，上掲書『日本語の感覚』55 ページ参照.
(46) 中根千枝『テタ社会の人間関係』講談社，昭和 59 年，18 ページ参照.
(47) 外山滋比古，上掲書『日本語の感覚』40 ページ参照.
(48) P. ミルワード『イギリス人と日本人』講談社，昭和 53 年，181 ページ参照.

※ この論文の完成に際して本学栗田有康教授の御一読，御批評をいただき，感謝申し上げます.